

# 経済学と心理学の統合を目指して

—潜在能力からの接近—

馬 田 哲 次

## I はじめに

経済学の危機が言われて久しい。社会主義経済は、理論的にはともかく現実のそれは完全に行き詰まったようである。しかしながら、資本主義経済は全く問題のない経済かと言えばそうではない。資本主義経済も多くの問題を抱えている。その最たるものは過労死問題であろう。豊かな社会と言われていて、我々が追い求めてきた豊かさとはいったい何だったのかと考えさせられる現象である。

現実の様々な経済問題に対して、既存の経済学は有効な解決法を示していないように思われる。その原因はどこにあるかと考えてみると、既存の経済学の枠組みが根本的に誤っているからであるように思われる。

本稿では、既存の経済学の枠組みに代わる、新しい経済学の枠組みを提示することを目的とする。そのために、II節では新古典派経済学を批判的に検討しながら、経済学の問題点を考察する。III節ではII節での問題点を受けて新しい経済学のコア、つまり新しい富の定義と人間観を提示する。それは、人間だれしももっている潜在能力を現実化のものとすることが人間の豊かさひいては社会の豊かさに繋がるということである。IV節では、

潜在能力を中心に経済を分析する場合、経済学と心理学が密接な関係をもっていることについて説明する。そこでは例として、疎外された労働を新しい枠組みで、簡単ではあるが分析を試みた。そして最後に V 節で本稿のまとめを行なう。

## II 新古典派経済学批判

既存の経済学の問題点をあげながら、経済学の目的課題等をこの節で考えていくが、そのために主として新古典派の経済学を批判的に検討することによりそれを行なっていこうと思う。新古典派経済学のコアは、次のように言うことができるであろう。

合理的な経済人、つまり私益を最大にするために利己的に行動する人間、を前提に、本質的に完全に自由な競争という架空的な制度の下における価格決定の理論である。尤も寡占や独占といった「現実的な」条件の下で考察する場合もあるが、コアはあくまでコアとして変わらない。今まで様々な新古典派の経済学に対する批判がなされてきたが、このコアに代わる新たな強力なコアを考え出さない限り新古典派の経済学が経済学の主流であり続けるであろう。本稿はそれに代わる新たなコアを提示する試みである。

経済学とは何かということを考える場合に、その目的を考えていくことから始めたいと思う。経済学の目的はアダム・スミスも

「政治家または立法者の科学の一部門と考えられる経済学 (political economy) は、二つの別個の目的をたてているのであって、その第一は、人民に豊富な収入または生活資料を供給すること、つまりいっそう適切に言えば、人民が自分のためにこのような収入または生活資料を自分で調達しうるようにすることであり、第二は、国家すなわち共同社会 (state or commonwealth) に、公共の職務を遂行するのに十分な収入を供給することである。経済学は、人民と主権者との双方を富ますことを意図しているのである。」<sup>1)</sup>

と述べているように、人々を豊かにすることである。ただ、豊かにするといった場合豊かさの中身が問題になるが、それは後で議論する。

経済学をこのように定義することに関しては、ワルラスが、

「人民に豊かな収入を得させること、国家に十分な収入を与えること、これは確かに二つのはなはだ重要な目的であり、もし経済学がこれらの目的を達成するとすればそれは著しくわれわれに役立つことになる。しかし私は科学の本来の目的がそこにあるとは思わない。実際に、科学の本来の性質は、あらゆる有益または有害な結果と全く無関係に、純粹の真理を追及していくところにある。・・・もし経済学がスミスのようなものであり、それ以外のものでないとすれば、それは確かに極めて興味ある研究ではあるが、本来の意味の科学ではない。・・・経済学はスミスが述べたものとは異なるものである。収入を与えようと努力する前に、経済学者は純粹に科学的な真理を追及し把握する。・・・スミスの定義は本来の科学としての経済学の目的を指示していないという意味において不完全である。・・・それは一言でいえば、科学をその応用によって定義することである。」<sup>2)</sup>

と批判している。科学の本来の目的は純粹の真理を追及していくところにあり、科学をその応用によって定義するのはよくないと。

しかしながら、ワルラスは、科学と技術の役割と重要性について述べたコックランの次のところを重要だとして引用している。

「科学的真理が正しく観察せられ、正しく演繹せられた後において、人間の仕事の運営のために適用せられる規則はこれから導き出そうとすることに対してわれわれは異論を唱えるものでもなく、またこれを筋違いのことも決して思わない。科学的真理が何の役にも立たないのはよいことではない。そしてこれを利用する唯一の方法はこれから技術を引出

1) スミス. A., 「諸国民の富」(6), 第3巻, 5ページ.

2) ワルラス. L., 「純粹経済学要論」(7), 5-6ページ.

すことである。すでに述べたように、科学と技術との間には密接な血族関係がある。科学は技術に証明を与え、技術の方法を正しくし、その進路を照らし指向する。科学の助けがなければ、技術は一步ごとにつまづきながら手探りで進むことしか出来ない。他方において、科学が発見した真理を価値あらしめるのは技術であって、技術なくしては科学の真理は不毛にとどまるであろう。また、科学的研究の主な動機はほとんど常に技術である。人が単に知ることの興味だけで科学的研究をすることは稀である。一般に人は役立つという目的をその研究に求めている。そしてこの目的を充たすのは技術によってのみである。」<sup>3)</sup>

つまり、科学的研究を人がするのは役立つという目的を求めていると。

経済学は、我々の生活に直接的な関わりをもっている。経済学は人々の役に立ち、また分かりやすく興味深いものであり、人々に日々変わる経済に対して経済学を通して関心をもたせ、理解を深めさせていくものでなければならない。また、経済政策に関する価値判断は行なってはならないという考え方もあるが、現実の経済では経済政策において経済学が重要な影響を及ぼしている。我々の生活に直接役立つなければ、経済学の研究はあまり意味があるとは思えない。よって、経済学をその目的によって定義し、その目的は人々を豊かにすることにあるとっていいであろう。

人々を豊かにするといった場合に豊かさの中身が問題になる。豊かさとは富であり、富をどう考えるかによって経済学は変わりうる。一般的に経済学では、ワルラスが言うように、富を次のように定義していると考えていいであろう。

「物質的または非物質的なもの（ものが物質的であるか非物質的であるかはここでは問題でない）であって稀少なもの、すなわち一方においてわれわれにとって効用があり、他方において限られた量しか獲得できないもののすべてを社会的富と呼ぶ。」<sup>4)</sup>（強調点は原著者）

3) 同書, 14ページ.

4) 同書, 21ページ.

しかしながら、このような富の定義は正しいのであろうか。換言すれば、現代の経済において意味のある定義なのだろうか。というのは、現代の経済では豊かさの指標として、収入あるいはGNPを用いているが、GNPが世界第二位であるのに過労死が起こったりしている。また、生活大国への道といったことも議論されたりしている。豊かさ、或いは富について考え直していくことが必要ではないだろうか。

また、富をこのように定義したときに価格決定の理論がとても重要になってくる。なぜなら、生産においては生産量が一定の下で投入量を最小にすること、消費においては予算制約の下で効用を最大にすることが経済学の問題になるからである。富を構成するものは全て価格が付けられ、交換の対象になる。逆に言えば、価格が付けられず、交換の対象にならないものは富ではない。そして、何をどれくらい生産、消費するかは全て価格をシグナルにしてなされる。したがって価格の決定ということが重要な問題になってくる。

価格の決定が重要なテーマになったときに、次のような問題が生じてくる。

すなわち、現実の経済を動かしているのは人間である。物の生産、消費、交換、すべてそれらの決定をしているのは人間である。しかしながら、そのような経済学では、最も大切な人間が背後に押しやられて、それが物或いは価格に解消されてしまう。また、価格を決めること、或いは価格で決めることにおいては、儲るか儲らないかが重要になり、人間の感情、心、本来の感性が失われてしまう。これは、マルクスが、次のように批判している通りである。

「経済学がとりあつかうのは、物ではなくて、人と人とのあいだの関係であり、結局は階級と階級とのあいだの関係であるということ、しかしこの関係は、つねに物にむすびつけられていて、物としてあらわれるといふこと、」<sup>5)</sup> (強調点は原著者)

また、新古典派の経済学によると、価格メカニズムが十分に働く場合に

は、資源の効率的な配分がなされているはずである。しかしながら、現実の経済では、ゴミの処理に困るほどゴミに悩まされている。資源の効率的な配分がなされているとは考えにくい。経済学では、合理的な経済人の仮定と富の定義をそのままにし、独占、寡占、公共財等々と、価格メカニズムが十分に働かない場合に経済現象がどのようなになるか分析しようとしてきた。資源配分が効率的になされていないのは、価格メカニズムが十分に働かないところに原因があると。しかしながら、現在大きな問題になっている環境問題は本来価格がつかないものの問題である。主流派の経済学では富と価格が密接に関連していたから価格の決定が重要な意味をもっていた。しかしながら、価格と富の直接的な繋がりがなくなると価格の決定はそれほど重要な意味をもたなくなってくる。あくまで新古典派の経済学の枠組みで考えようと思ったら、価値があると思われるものには全て価格を付けなければならなくなってくる。水道の水がまずなくなったので、おいしい水をお金を払って買うようになってきた。昔は、水はただで手に入ったものである。このままいくと人間にとって一番重要なものの一つである愛情さえもカネで売り買いされるかもしれない。本当にそれでいいのだろうか。経済学の枠組みを変えて、合理的な経済人の仮定と富の定義をもう一度考え直すことが必要であると思われる。

マーシャルが、

「経済学は日常生活を営んでいる人間に関する研究である。それは、個人的ならびに社会的な行動のうち、福祉の物質的要件の獲得とその使用にきわめて密接に関連している側面を取り扱うものなのである。

このようにして経済学は一面においては富の研究であるが、他の、より重要な側面においては人間の研究の一部なのである。」<sup>6)</sup>

と述べているように、人間をどう捉えるかということは経済学にとって重

5) マルクス、K.、「経済学批判」(5)、266ページ。

6) マーシャル、A.、「経済学原理」(2)、第1巻、3ページ。

要な問題である。それは、経済現象は人間の行動によって生じ、人間の行動が変われば経済現象も変わるからである。しかしながら、人間の捉え方に関しては合理的な経済人という捉え方から一步も進んでいないように思われる。人間には確かに合理的な側面もあるが、それが人間にとってそれほど重要な側面なのであろうか。新たな人間観をうち立てることが、今の経済学に最も必要とされているのではないだろうか。

また、合理的な経済人を仮定し、完全競争の下での価格決定を論ずることは次のような問題がある。つまり、本質的に変化し発展していくものを分析することが出来ないということである。経済合理的な人間は、いついかなるときも経済合理的に行動する。いつも同じ尺度で矛盾のないような行動をとる。それと完全競争とが結びついたとき、均衡点はいつも同じである。人間の行動パターンが変わらないということと、調整が終わり、最終的に経済が行きつく先を問題にするからである。初期条件が変化すれば均衡点は変化していくが、人間或いは経済の運動は、化学の実験のように反応が行きついてしまっただけで終わるような本質的に静学的な運動ではなく、結果を新たな原因とし、自律的に変化していくものである。そのような本質的にダイナミックな運動と変化を分析することは出来ない。計量モデルによる経済予測が行なわれているが、そこでは人間の行動と経済構造が推定時と予測時において変わらないことが前提になる。しかしながら、現実の経済は生き物のように変化している。それは、人間の心、感情が変化し、行動が変化しているからである。このように変化している人間の行動を、経済合理的という単純な、変化しない行動パターンから分析しようとするのは本質的に無理があるように思われる。

この節で述べてきたことをまとめてみよう。

経済学は、人々を豊かにすることを目的とする。しかし、豊かさの中身が何であるか、富とは何か問い直す必要がある。

富の中身が変わったとき、それと密接な関係をもっていた価格を分析することの意味が問い直される。経済現象は人間の行動によって引き起こさ

れるのに、人間が背後に押しやられ、人間の本来の気持ちがなおざりにされて、物や価格の關係に解消されるのは問題がある。

經濟現象は人間の行動が変化すれば変化する。時代、環境、人間關係によって人間の行動は変化する以上、經濟現象も変化せざるを得ない。変化する經濟現象を經濟學が問題にする場合、合理的な經濟人という同一、單一、單純な人間についての仮定から出発するのは問題がある。これでは、人間の行動が固定化されてしまい、經濟現象は人間の行動によって決まる以上、そこから描き出される經濟現象も固定化されたものにならざるを得ない。これでは変化し発展する經濟を分析することは出来ない。合理的な經濟人に代わる新たな人間觀が必要である。

### III 新しい富の定義と人間觀

前節で經濟學の目的は何かということについて考えてきたが、そこで得られた結論は、人々を豊かにするということであつた。

人類が生まれて以来、様々な努力をし、その生活様式を変えて来たのは、豊かな生活をおくるためだといつてもいいであろう。その意味では、經濟學は人類の誕生とともにあるといつてもいいであろう。

そこで、豊かさの中身が問題になる。豊かさの指標としては一般的に所得、すなわち GNP が使われている。日本では、GNP を大きくするために必死の努力をし、世界で第 2 位になるほどまでになった。

しかし、その豊かさは真の意味で豊かだといえるだろうか。朝早くから夜遅くまで働いて、なるほど多くの所得を得ることは出来る。しかしながら、休みもとりにくく、会社のためと思ひ心身の疲れをおして出勤する。会社に奉仕し、家族とすれ違い夕食のだんらんを共に過ごすこともほとんどない。甚だしい場合には過労死してしまう。このような生活、あるいは社会が、豊かな生活あるいは豊かな社会であると言えるだろうか。

このように考えてくると、豊かさとは収入の多寡とは必ずしも一致しな

いということが出来る。もちろん収入がなければ生活していくことはできず、「貧すれば鈍す」、「恒産なければ恒心なし」という言葉もあるように、最低限の収入は必要ではあるが、ある一定の所得を越えたところで、豊かさと収入の多寡は関係がなくなるように思われる。「人はパンのみで生きるものではない」のである。

豊かさとは何かとってよく問題になるのは、心の豊かさである。心の豊かさをもう少し深く考えてみよう。心が豊かであるとは、例えば、思いやりがあるとか、優しいとか、余裕があると言い替えてもよいであろう。心に余裕がない場合はイライラしたり、感情の起伏が激しくなるが、甚だしい場合には他人に対して敵意をもつほどイライラしたりする。豊かな心の状態がどのようなとき生じているかをみると、一つには、最低限の生活が保証されているときであるといえる。最低限の生活が保証されていないと、あるいは、保証されるという確信がないと、ぎすぎすしたりあせったりと、心に余裕は感じられない。

すると、何が最低限の生活であるかと言うこと自体問題になる。六畳一間のアパートで最低限の生活が出来ていると思う人もいれば、一戸建ての家に住み、自動車を所有していても最低限の生活は満たされていないと言う人がいるかもしれない。このように考えると、最低限の生活が保証されているかどうかは、その人の欲求にも依存していることがわかる。つまり、人それぞれある一定の欲求水準を持っていて、その欲求水準と現実の生活を比べてみた場合に、その欲求が満たされていればその人は豊かであるし、満たされていなければその人は豊かではないとするのである。

このように考えは、次の点で問題になる。それは、欲求水準が低い人ほど容易に欲求が満たされてしまうため豊かになるということである。六畳一間のアパートに住み満足している人と、一戸建てに住み不満足な人とを比べた場合に、前者が豊かになってしまう。しかし、この場合には、一戸建てに住む人を豊かだとするのが普通だと思われる。

その人の主観的な満足度のみには依存するのではなく客観的で、なおかつ

心の豊かさも反映される豊かさの指標が必要とされる。それは、人間はパンを必要とするが、またパンのみで生きるものではないからである。

このことを、セン・A の「潜在能力アプローチ」<sup>7)</sup>を手掛かりに考えていきたい。このアプローチについてセンは、

「福祉を、人が享受する財貨（すなわち富裕）とも、快樂ないし欲望充足（すなわち効用）とも区別された意味において、ひとの存在のよさの指標と考えようと試みる。基本的なレベルにおいて、ひとが実際に達成しうる価値ある活動や生活状況に即してひとの生き方の質を判断することは、不可避である。

ひとの機能は多義にわたるから、さまざまな機能を相対的に評価するという問題が生じることは当然である。しかし、福祉の計測にあたっては、このような評価作業を避けて通るわけにはいかない。福祉の計測は、結局のところひとの存在と生活の質の評価である他はないからである。」<sup>8)</sup>  
(強調点は原著者)

「『潜在能力アプローチ』は機能の客観的特徴に注目し、しかもこれらの機能を、感情にではなく評価に基づいて判断する。」<sup>9)</sup>

「『潜在能力アプローチ』は、ひとびとがその人生において達成したいものに関してひと自らが下す（内省的・批判的な）評価に基礎をおいているからである。」<sup>10)</sup>

と述べている。

このアプローチでは、ひとの生き方を内省的に評価することによって、豊かさを客観的に評価していこうという試みである。ひとが豊かであるか

---

7) センも私も、潜在能力という言葉を用いているが、意味が少し違う。それは読み進むうちに明らかになると思うが、センは財と財を利用する場合のその利用の仕方の多さで定義し、私は人間が生まれながらにもってはいけるが、まだ現実化していない能力と定義している。

8) セン・A., 「福祉の経済学—財と潜在能力」(4), 2-3 ページ.

9) 同書, 5 ページ.

10) 同書, 6 ページ.

どうかは、その人がどんな生き方をしているかどうかに深く係わっている。前向きに生きているか、実現したいものを実現しているかどうかで、豊かさを評価出来ると思う。

また、私益というとは一般的には収入を考えるが、ひとの私益の判断について、センは次のように述べている。

「私はひとの私益とその達成について考察する方法を大きく二つに分け、それぞれ『福祉』と『好機』と名づけることにしたい。『福祉』(well-being)はひとが実際に成就するもの—彼/彼女の『状態』(being)はいかに『よい』(well)ものであるか—に関わっている。一方『好機』(advantage)は、特に他人と比較してあるひとがもつ現実の機会に関わっている。」<sup>11)</sup>

これによると、人が現実直面する機会が他の人々に比べて恵まれているか、ということと、直面する機会のなかから、どれを選び取りそれを達成しているかの二つの方法で考察しようとしているようである。

例えば、Aさんは、与えられる仕事はいつもルーティンワークやダーティワークでしかないが、Bさんは大きなプロジェクトを任されたりする。こういうのが「好機」に関わることであろう。日常的な用語で言えば、チャンスに恵まれるということ。より多くの「好機」に恵まれるかどうかは、その人がより豊かな人生を送るかどうかの大前提になるであろう。

次に、多くの「好機」に恵まれていてもそれを生かすことが出来なかったらその人の人生は豊かだとはいえない。大きなプロジェクトを任される機会があったときに、それを引き受けるか引き受けないかという選択があるし、引き受けた場合に成功する場合と失敗する場合がある。引き受けて成功する場合がもちろんその人が豊かな人生を送っている場合であろう。ここではもちろん、大きなプロジェクトを引き受けたために帰宅時間が遅くなり、家族とのコミュニケーションがうまくいかなくなり家庭が崩壊する、というようなことはないとしている。要点は、その人がより多くの「好

11) 同書, 15ページ.

機」に直面しているかどうかということと、直面する「好機」を生かし実現しているかどうかである。

以上述べてきたように、センは人が豊かであるかどうかはその人の生き方と密接に関連しているとし、「福祉」と「好機」という概念を持出してきた。さらに、福祉について考察をすすめる。

センは、

「ひとの福祉について判断する際には、彼/彼女が所有する財の特性に分析を限定するわけにはいかない。……われわれはあきらかにひとの『機能』にまで、すなわち彼/彼女の所有する財とその特性を用いてひとはなにをなしうるかにまで考察を及ぼさねばならないのである。

……

機能とはひとが成就しうること—彼/彼女がおこないうること、なりうること—である。」<sup>12)</sup>

という。

例えて言えばこういうことであろう。人がパソコンを買った場合を考える。Aさんはパソコンをかったものの使い方がよく分からないので、押し入れにしまいこんだままである。Bさんはもっぱらワープロとして使用している。Cさんはワープロとしてはもちろん、表計算、パソコン通信から考えられるありとあらゆることにパソコンを利用していると。

このように、機能は財をもつこととは別物である。また機能は機能が産み出す幸福とも区別されなくてはならないとセンはいう。つまり、パソコン通信することと、パソコン通信から得られる幸福感とは区別されなければならない。

このような議論を少し数学的に表現している。少し長くなるが引用してみる。

---

12) 同書, 21-22ページ.

「  $x_i$  = 個人  $i$  が所有する財のベクトル

$c(\cdot)$  = 財ベクトルをその特性ベクトルに変換する (必ずしも線形ではない) 関数。

$f_i(\cdot)$  = 個人  $i$  が (その所有する財の特性ベクトルから機能ベクトルをうみだすために) 実際に行いうる財の利用パターンを反映する, 個人  $i$  の「利用関数」

$F_i$  = 個人  $i$  が実際に選択可能な「利用関数」  $f_i(\cdot)$  の集合

$h_i(\cdot)$  = 個人  $i$  が達成する機能に関連づけられた幸福関数

ひとがある利用関数  $f_i(\cdot)$  を選択すると, 彼/彼女が財ベクトル  $x_i$  を用いて達成する機能は,

$$b_i = f_i(c(x_i))$$

というベクトル  $b_i$  で与えられる。そのとき彼/彼女が享受する幸福  $u_i$  は

$$u_i = h_i(f_i(c(x_i)))$$

で示される。ベクトル  $b_i$  はひとのありさま (例えば栄養は行き届いているか・服装はきちんとしているか・移動能力は備わっているか・コミュニティの生活に役割を果たしているかなど) を表わすものと考えうる。そのとき、「福祉」とは, この  $b_i$ , すなわち彼/彼女が達成しえているありさまの評価であると考えることができる。

$b_i$  を評価することは,  $b_i$  の集合をランクづけることだと考えてよい。

.....

$v_i(\cdot)$  が個人  $i$  の評価関数であるならば, 機能ベクトル  $b_i$  の価値は

$$v_i = v_i(f_i(c(x_i)))$$

によって与えられることになる。

これまでは、集合F内のひとつの利用関数  $f_i(\cdot)$  に関心を集中してきたが、ベクトル  $x$  が与えられたとき個人  $i$  にとって実現可能な機能ベクトルの全体は

$$P_i(x_i) = \{b_i \mid \text{ある } f_i(\cdot) \in F \text{ に対して } b_i = f_i(c(x_i))\}$$

という集合によって与えられる。もし個人  $i$  が集合  $X_i$  内の財ベクトルのみを選択できるのであれば、彼/彼女が実現できる機能ベクトルの集合は

$$Q_i(X_i) = \{b_i \mid \text{ある } f_i(\cdot) \in F_i \text{ とある } x_i \in X_i \text{ に対して} \\ b_i = f_i(c(x_i))\}$$

で与えられることになる。

集合  $Q_i(X_i)$  は、(財の特性を機能に変換する) 個人的特徴  $F$  と財に対する支配権  $X$  (「権源」) が与えられたもとの、個人  $i$  が機能の選択に関してもつ自由度を表現している。この意味において、 $Q_i$  をこれらのパラメーターが与えられたもとの個人  $i$  の「潜在能力」(capabilities) と呼ぶことができよう。それは、彼/彼女が達成しうる機能のさまざまな組み合わせ(「ありかた」)を反映するものである。

評価関数  $v_i(\cdot)$  が与えられれば、個人  $i$  が達成しうべき福祉の評価は

$$V_i = \{v_i \mid \text{ある } b_i \in Q_i \text{ に対して } v_i = v_i(b_i)\}$$

という集合によって特徴づけられる。」<sup>13)</sup> (強調点は原著者)

ここで注意すべきことは、機能の評価  $v_i$  と機能からえられる幸福感  $u_i$  は全く異なるということである。

13) 同書, 23-26ページ.

ここでの議論を簡単に述べると次のようになる。

財としてパソコンを考える。パソコンの利用として、ゲーム、ワープロ、統計処理、パソコン通信が考えられる。パソコンを利用して彼/彼女が行ないうことの集合—この場合はゲーム、ワープロ、統計処理、パソコン通信—が潜在能力である。利用方法が多くなると、例えばコンピュータ・グラフィックが追加されると、潜在能力は大きくなる。そして、ゲームあるいはワープロとして利用した場合の評価として福祉を評価する。

このような潜在能力の捉え方は、財がまず与えられているところに問題はありはしないだろうか。ひとの生き方の評価には財をどのように利用するかということよりも、どういう財を選ぶかということのほうが重要であると思われる。ベクトル  $b$  はひとのありさま、例えば服装はきちんとしているか、を表すという。センのように考えると、ある服装が与えられたときに、その服の着こなし方が色々あって、だらしない着方とかきちんとした着方とかがある。どういう着方をしているかが「機能」であり。着方のバリエーションの多さが「潜在能力」である。しかし生き方と直接的にかかわるのは、服をどう着るかということよりもどの服を選ぶかということではないだろうか。実際、生き方が消極的で内向的な生き方の場合は暗い感じの服を選んでいたので、積極的で外向的な生き方に変わったときには、明るい色の服を選ぶということがある。

生き方の評価と豊かさの評価には大きな関連があると思われる。そして、貧困なときは少しの米しか食べられないが、少し豊かになってくるとたくさんのお米を食べられるようになるが、もっと裕福になると副食が増えたりパン食になったりして食べる米の量は再び減少したりする。このように生き方と財とは直接的な関係はないように思われる。

人の豊かさと生き方が密接な関係があることをセンの潜在能力アプローチを手掛かりにみてきた。ただ、センの潜在能力の捉え方は財あつての潜在能力というところがあり、この点が不十分である。この点に関して以下考察しよう。

潜在能力を人が生まれながらにして本来持っているが、まだ十分に発揮させていない能力と定義しよう。人は生まれながらに様々な能力を潜在的にはもって生まれてくる。それが、適当な環境、教育の下で開花させられる。走る。言葉を話す。コミュニケーションする。理解する。リーダーシップをとる。等々様々な能力がある。人が現実には直面する機会のなかで、これらの能力を生かし、開花させ、様々なことを実現させていったとき、人は真に豊かな人生を送っているということが出来るであろう。一人一人が潜在的にもっている能力を十分に生かし、さらに一人、二人と多くの人々が能力を生かすということを意識し、それをうい始めたとき、経済は前進し、さらに能力を生かし合うということを意識し、行ない始めたとき、経済は大きく前進すると言えるであろう。

別の角度から豊かな人生をみてみよう。それは、人の欲求が段階的に変化していくという捉え方である。マズローによれば、欲求は次の5段階からなる。<sup>14)</sup>

- ①生理的欲求…最低限の生活をしたい。
- ②安全の欲求…安全に守られたい。
- ③所属と愛の欲求…周りの人々に受け入れられたい。
- ④承認の欲求…自分のことを正当に評価されたい。
- ⑤自己実現の欲求…まわりから何と言われようと自分のやりたいことは達成していききたい。

人は何か満たされたいと欲求し、それが満たされると次のものを欲求する。このように、達成された欲求の後には新たな欲求が生じるが、それはご飯を食べたらパンを食べたいというような同じような欲求ではなくて、質的に変化し、段階が上がっていくような欲求が生じてくる。このように、より高次の欲求を実現していくような生き方をしているかどうかで豊かさを内省的に評価していくことは出来ると思う。

14) マズロー、A. H., 「改定新版人間性の心理学」(3), 56-72ページ。

食べていくだけには十分な収入がある。家には溢れるばかりの物がある。しかし、それだけでは豊かな生活をしているとはいえない。家族とのコミュニケーションがうまくいっていないから。マズローの欲求段階の第三段階にいる。この場合には、収入を増やすために一時間多く働くよりも、働く時間を減らして収入を減らしても、家族と話す時間を増やしたり、コミュニケーションの能力を高めたりする方が豊かな生活を送ることが出来る。

豊かな生活を送るという場合、家庭が豊かであるかどうかが重要になってくる。家庭が消費或いは生産の基本的な単位であるからである。家庭が豊かかどうかは、生活していくための十分な収入があるかどうかは重要な点であるが、それ以上に所属欲求を充たすかどうか、現代の社会では重要である。居心地のいい豊かでくつろいだ家庭であるかどうかである。そのような家庭であるためには、夫婦の関係がいいということが大前提になるが、そのためにはある一定の収入を得た後は、収入よりもコミュニケーション能力の方が大切になる。また、人は社会的な動物であり、所属している社会集団内での人間関係がどのようなものであるかも重要である。

センの潜在能力の捉え方によれば、所有する財が増えたり、財の利用方法が増えたりすれば潜在能力は高まる。しかし、コミュニケーションの能力が高まることを直接に潜在能力の高まりとわれわれは捉える。それは財の利用と直接的な関係はない。

ここで、人間、豊かさ、経済学についてまとめておこう。

人間とは、様々な無限の能力を潜在的にもっている生き物である。

豊かさとは、心の豊かさ、生活の豊かさである。それは収入の多寡とは直接的な関係はなく、人の生き方と密接な関わりをもっている。一人一人がもっているその無限の潜在能力を現実のものとしていくような生き方をしていくとき、人は真に豊かな人生を送ることができる。

経済学とは、人々を豊かにすることを目的とし、そのために経済社会システムと潜在能力の関係ならびに潜在能力を開花させていく経済社会システムの構築を研究していく学問である。

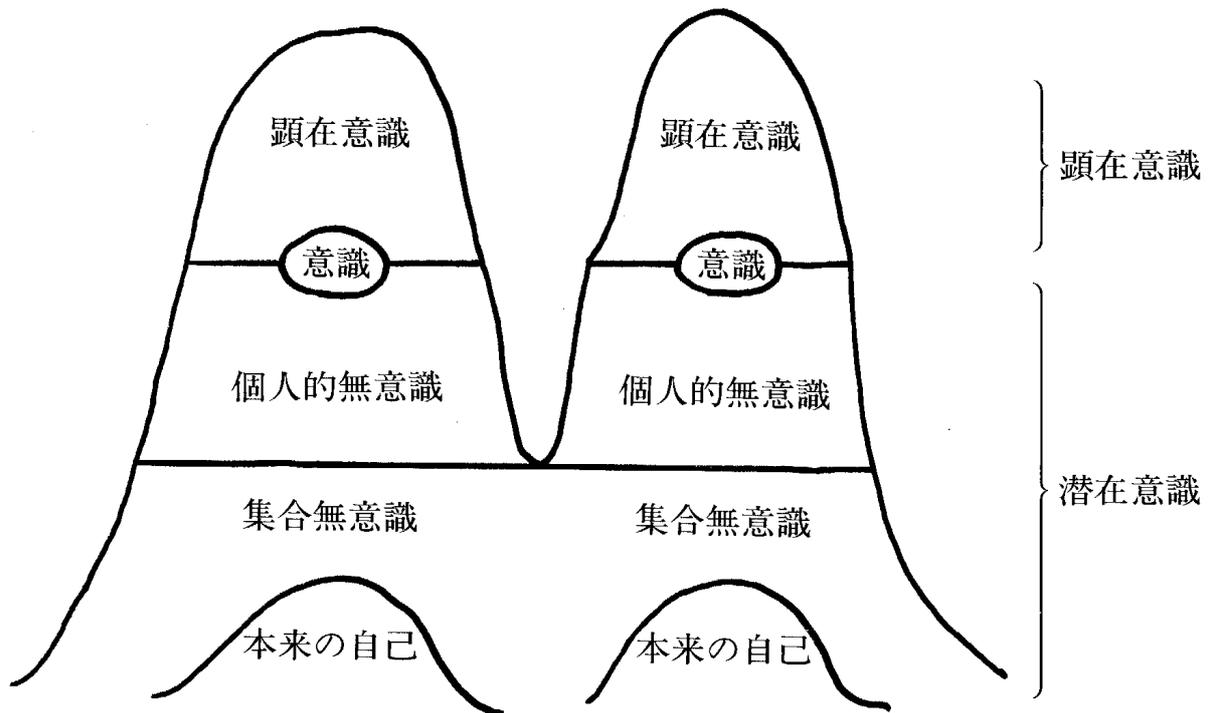
#### IV 経済学と心理学

III節で人間は無限の潜在能力をもっており、その潜在能力を開花させて生きることが豊かに生きることに繋がっているということを述べた。人間がもっている潜在能力を浮上させ、意識化し現実のものにしようとする場合、それはまず直接的には心理学と関係がある。心理学は人間が、人間がというより自分自身が誰であり、何処からきたのか、どんな可能性を持っているのか、自分自身に隠された能力とはいったいどのようなものであるのか、自分はいったい何であるのか、どうしたらいいのか、何処にいきたくて、どんな考えをして、どのようになりたいのか、ということをつねに考え続けているのであった。私自身が心理学について学び、また実際に心理学のワークショップ、セミナー、或いは日常生活の中で体験したことから、人はだれしも様々な隠された能力をもち、思ったことを実現させる力があるということに確信をもてるようになった。そして、自分が思ったことを実現させていくような生き方をしたとき、人はより豊かな人生を送っていると思うようになった。尤も、どんな思いでもいいかというとは必ずしもそうではないが。

そのことを説明するために、人間の意識のモデルから説明していこうと思う。それは、ユング心理学やゲシュタルト心理学でいわれていることを基に、私自身の経験から考え出したものである。今後の研究によって、変更される可能性があることをあらかじめお断りしておく。

人間の意識は次の図のようになっていると思われる。

簡単に説明する。顕在意識は自分自身について自覚している部分である。自分の性格とか、自分の価値観等について自覚している部分だと思ってもらえばいい。意識とは、何かを行なうときにそれを意識して行なう場合と、無意識のまま行なう場合とがあるが、そのような場合の意識である。例えば、今まで持っていた車のキーを何処に置いたか思い出せない場合がある。



その場合は意識していなかったという。或いは意識がとんでいたという。多くの方は大部分の時間を意識をもつことなく生活している。潜在意識は自己について知らない部分である。その中で、個人に関わることを個人的無意識、人類に普遍的なものを集合無意識という。人は、白紙の状態では生まれてこない。遺伝その他で、両親、さかのぼり先祖、人類の伝統等様々な情報をもったまま生まれてくる。両親から、家から、地域から、国家から、……、個人的無意識と集合無意識の間のどこに線を引くかは、今の時点でははっきりしていない。なお、集合無意識のレベルで人々はみな繋がっている。そして、意識の一番深い部分に本来の自己がある。

豊かに生きるということは、この本来の自己と対話をしながら、自分本来の生き方で生きるということである。多くの方は、自分本来の生き方をしていない。例えば、職業を選ぶ場合でも、自分が本当にやりたい仕事をやっている場合は稀である。食べていくためにやむなくやりたくもない仕事をやっている場合もあるだろうが、多くの場合は本当にやりたいことが分からない場合である。それは、両親その他から様々な価値観を教え込まれ、その価値観でがんじがらめになり、意識することなくその価値観の通

りに行動してしまうからである。潜在意識の中にそのような価値観がブロックのようにつまっていて、本来の自己となかなか対話することが出来ない。

疎外された労働という概念があるが、この意識のモデルでそれを説明すると、次のようになる。すなわち、本来の自己とは違ったところで行なっている労働が、疎外された労働であると。

資本主義社会では、労働力しか売るものをもたない労働者が、資本家と労働契約を結び労働する。ひとたび労働契約を結ぶと、そこでの労働は、資本家或いは機械に従属したものになる。自分のペースで労働をするのではなくて、機械のペースに自分を合わせるしかない。また、分業の発達により労働は細分化されるが、細分化された労働は、人間の能力の一部分しか使わない。本来の自己がもっている能力を全面的に使うということがない。本来の自己は抑圧される。

本来の自己は抑圧されてくると、今のままではいけないと様々なメッセージを身体や周りの人々に送る。メッセージが身体に送られたときは、それは様々な病気となって現れ、周りの人々に送られたときは人間関係の悪化としてあらわれる。しかし、休むことを、ゆとりをもってコミュニケーションすることを労働の現場が許さない。抑圧がピークに達すると倒れる。ひどい場合は、突然死とか過労死になって現れる。

かなり単純化された説明ではあるが、このような図式は今日の資本主義諸国でも基本的には当てはまるのではないだろうか。

杉村芳美は労働のユートピアとして、自己対象化の労働（生産的行為を通しての自己実現）とアソシエーションの労働（労働の本来的なあり方を協働の側面においてとらえる）を挙げている。<sup>15)</sup>杉村は両者が別のようなとらえ方をしているが、これらは本来的な労働を二つの側面からみたものである。本来の労働は、自己対象化の労働の側面からみれば、本来の自己の対象化である。また、本来の自己は集合無意識の内部にあり、集合無意識

15) 杉村芳美、「脱近代の労働観」(5)、第6章

はすべての人々と繋がっている。労働を通してコミュニケーション出来る。

また、杉村は両者の労働がユートピアであるとしているが、私はそうは思わない。潜在意識を意識化し、本来の自己との対話を取り戻すことが出来ればそれは可能であると考え。心理学ではそのための様々な技法が開発されている。それは、日常生活をはなれ、心身が解放され自由に振る舞うことが許される空間では一定の成功を修めるが、日常の生活に戻るとともに戻ってしまうことが多い。社会のシステムとして本来の自己との対話が出来にくいシステムになっているからである。例えば、本来の自己と対話するためには、くつろいだゆとりのある時間を必要とする。しかしながら、長時間のストレスの多い労働の中では、本来の自己と対話する時間はないし、心のゆとりさえない。

本来の自己を取り戻すための様々な技法の開発は心理学の研究テーマであるが、そのための社会経済システムの研究は経済学の課題になる。両方の学問の研究が共に発展していかなければ真に豊かな社会を築くことは出来ない。

## V まとめ

本稿では、経済学とは何かということについて考えてきた。その結論は経済学とは人々を豊かにする学問であるということである。

その際豊かさの中身が問題になる。一般的には所得が多いことが豊かであることと考えられているが、GNPは増えているにもかかわらず、その反面過労死が増えたりしている現実をみると、所得の多寡で豊かさを計ることが出来るのかどうか疑問になってくる。

本稿でえられた結論は、その人が本来的にもっている能力つまり潜在能力を発揮させながら生きるということが、豊かに生きるということであった。そのように生きたとき、心も豊かになり真の意味で豊かな生活を送ることができる。それは、換言すれば、自己実現していく生き方である。マ

ズローの欲求の五段階説によれば、欲求の段階が高度な段階になり、最後に自己実現欲求で生きるというふうに言ってもいいであろう。

人が自己実現していく人生をおくれない場合、それには大きく分けて二つの原因がある。一つは心理学的な原因で、潜在意識の中に両親その他の人々から教え込まれた観念でがんじがらめになっている場合である。もう一つは社会システム的な原因で、自己を見つめるためのゆとりのある生活を送れない場合である。自己実現する豊かな人生を送る場合には、この二つの原因を取り除かなくてはならない。心理上の原因に関することは心理学の研究課題になるが、社会経済システムに関することは経済学の課題となる。

本稿では、経済学と心理学が潜在能力を現実化させていくという点で密接な関係にあるということ、疎外された労働を例に取り示してきた。

そこでの説明は要点のみを説明したもので、もっと詳しく展開する必要がある。今後、経済学で取り上げられてきた様々なテーマを潜在能力という観点から説明し、経済学が我々の生活を豊かにすることと密接な関係をもっていることを説明していこうと思っている。

#### 参考文献

- 1) マルクス. K., 「経済学批判」, 武田隆夫訳, 岩波文庫, 1956年
- 2) マーシャル. A., 「経済学原理」, 馬場啓之助訳, 東洋経済新報社, 1965年
- 3) マズロー. A. H., 「改定新版人間性の心理学」, 小口忠男訳, 産業能率大学出版部, 1987年
- 4) セン. A., 「福祉の経済学—財と潜在能力」, 鈴木興太郎訳, 岩波書店, 1988年
- 5) 杉村芳美, 「脱近代の労働観」, 東洋経済新報社, 1990年
- 6) スミス. A., 「諸国民の富」, 大内兵衛, 松川士郎訳, 岩波文庫, 1954年
- 7) ワルラス. L., 「純粹経済学要論」, 久武雅夫訳, 岩波書店, 1983年